

北部病院だより 第106号(2017.4)

Showa University Northern Yokohama Hospital

【巻頭言】 病院長就任のご挨拶

【副院長就任のご挨拶】

【栄養科からのご案内】

【患者さんからのご意見・ご要望】

【医師の配属・異動】【診療統計】

【TOPICS】 第2回災害対策訓練を開催しました

【TOPICS】 JMECC を開催しました



当院にもつくしと共に春が訪れたようです。
もぐらも顔をのぞかせていますね！

至誠一貫



90th
SHOWA University
至誠一貫 since 1928

当院は2001年4月1日、学校法人昭和大学が開設する附属病院のうち8番目の病院（横浜市北部医療圏の地域中核病院）として都筑区茅ヶ崎中央で産声を上げました。開院日は日曜日であったことから救急外来のみでの幕開けでした。あれから16年が瞬く間に過ぎ、この4月で17年目を迎えました。開院時428床（現在689床）の入院病床で運用を開始しましたが、その後、西病棟（緩和医療・メンタルケア病床）の開棟や、中央棟7階・8階病棟の完全開棟によって開院翌年の2002年5月には全病床の開棟となりました。その後、小児科GCU病棟や西棟産科マタニティ病棟の新規開棟、PET/CT稼働開始、外来化学療法室や女性専門外来、さらに歯科口腔外科外来（歯科室）を開設してきました。

開院時に初代黒川病院長のもとに掲げられた「病院の理念」を引き継ぎ、昭和大学が全学を挙げて取り組んでいる「チーム医療」の実践によって患者さん自身の権利や尊厳を守り、今後も患者さんからの深い信頼に応えられる品格のある病院づくりを目指したいと思っております。また、日々の診療だけでなく、これからの医療を担う医療者育成のために教育や研究にも引き続き力を注いでいきたいと考えています。

「チーム医療」はつねに患者さんが中心となり、その方の診療に携わる職員同士（医師と看護師・薬剤師・検査技師・栄養士・理学療法士・ソーシャルワーカー・事務職員ほか）が互いに連携を密にして実施することが重要であり、そのためにも院内で働くすべての職員相互のコミュニケーション（職員間の思いやりも）を充実すべきものと思っております。「チーム医療」では、その実践に向け重要な役割を持つ医療者が多数存在することを忘れてはならず、医師とともに診療を支える病棟・外来・検査部門の看護師・技師・事務職員、さらに心理的問題や社会的問題ケアの専門家が介入し、多職種が情報を共有しながらその立場で補助し合うことで unnecessary 医療費の支出を省き、細部に目の行き届いた医療を提供できるものと信じています。これからも近隣の地域医療機関との連携を深め、患者さんの円滑な受け入れ体制や退院調整の推進はもちろんのこと、患者さん一人ひとりの権利を守りながら理想的なパートナーシップを構築することによって、地域中核病院としての役割を十二分に果たし続けたいと考えています。

最後に、昭和大学の教職員や関連部署の人達が、お湯が沸くような熱い思いで診療活動に加わり、その総力戦で日々の業務が実施されていることに対して心より感謝したいと思います。

副院長就任のご挨拶



私は 1985 年に昭和大学病院第二内科で血液内科医としてのスタートを踏みました。その後 1990 年から 2.5 年間カリフォルニア州立ロスアンゼルス校血液腫瘍科に留学し様々な国からやってきた多くの人々から刺激を受け、またロスアンゼルス暴動や湾岸戦争など日本では経験することのない出来事に触れました。1993 年から 7 年間勤務した埼玉県立がんセンターでは血液悪性腫瘍の治療、特に骨髄移植の専門チームを立ち上げ、チーム医療について学びながら、緩和ケア病棟や外来化学療法室の立ち上げにも参加ができました。また 2001 年からの約 1.5 年間は海外でのボランティアや信州の山の中での在宅医療を経験したことも含めすべてが、現在の昭和大学横浜市北部病院で勤務する私の財産になっていると思います。

北部病院が開院して 1 年が経過した 2002 年に血液内科医がやはり必要との病院の判断で私は内科の一員になることができました。同じ場所に長く留まるのが苦手な私ですので一体何年勤まるのかと友人達は思っていたようですが、今日に至るまで続いているのは私自身驚きです。血液内科医が慢性的に不足している日本の現状もあり当院で治療する血液疾患の患者さんは多く、やりがいのある毎日です。当院の特徴として下部消化管原発の悪性リンパ腫症例が多く、各々の症例により手術を先行、または化学療法のみなど最良の治療方針をとれるよう他科と密にコミュニケーションをとるとともに、メディカルスタッフを含めたチーム医療が極めて重要と感じています。

2011 年に当院は地域がん診療連携拠点病院に指定されました。早期がんから末期がんまで院内で治療を簡潔することもできます。専用調剤室を完備した 17 床の外来化学療法室が稼働し年間 3400 件の化学療法を施行しています。化学療法は全例が委員会で承認されたレジメンオーダーにより管理され、安全で的確な化学療法が施行されています。また、がんのどの段階であっても緩和ケアチームやメンタルケアセンターを含めた「QOL を最大限に尊重した集学的医療」を目指しています。積極的治療を望まないまたは望めない患者さんの療養の場として、地域医療機関と連携した在宅療養や当院緩和ケア病棟、またはこれまで繰り返し化学療法のため入院してきた馴染みの一般病棟をも選択肢としてもつことができ、各々のケースまたは病状により療養の場所を変化させることができます。患者さんやそのご家族のお気持ちを尊重し、高度で暖かい医療を提供できる大学病院として、また地域の中核病院としての役割を果たせる病院を今後も目指したいと考えております。

副院長 坂下 暁子

便秘解消は朝が勝負！

便秘を解消するには、朝の過ごし方が大事。まずは朝ごはんをしっかりと食べること。特に穀類を多めにします。一緒にきのこや野菜がたっぷり入った具たくさん汁を食べると、腸の動きが活発になります。汁物に、乾燥食品である切り干し大根や干し椎茸を入れると効果倍増！ また、10分早く起きて、ゆっくりトイレに入る時間を作ることも大切です。



★栄養科の取り組み～オゾン水の利用～

果物や生野菜を提供する際には、オゾン水につけ込み、殺菌処理をしています。

安心安全な食事を提供するよう、努めています。

～オゾン水とは～

シンクや排水口の殺菌・洗浄だけでなく、野菜などの食材の洗浄、まな板や赤ちゃんの哺乳瓶・おもちゃの殺菌、ペットの体やペット用品の殺菌などにも有効的です。

安全かつ確実に殺菌・消臭を行いたいという目的でオゾン水が活用されています。

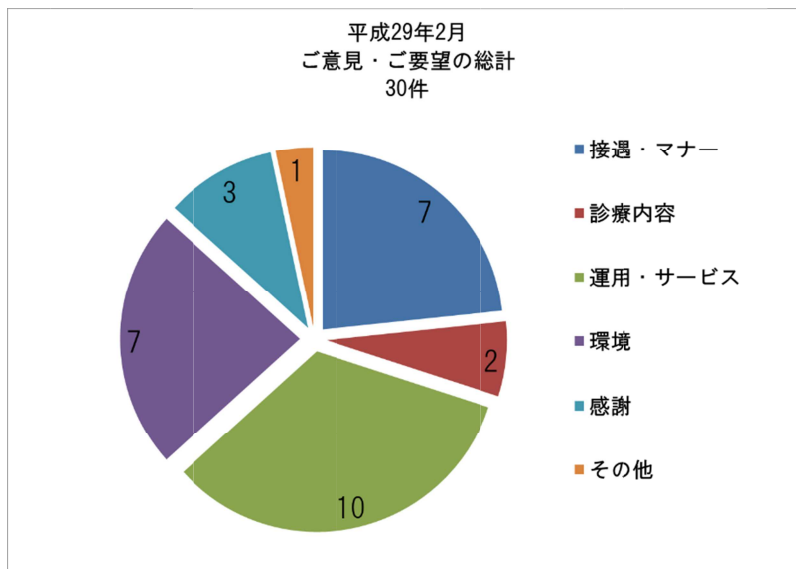
患者さんからのご意見・ご要望

日々患者さんより頂きましたご意見・ご要望に関しましては、院長及び関連する部署の責任者に報告し、改善に努めております。

今までのご意見の中で多くいただいたものや最近のご意見・ご要望を中心に改善策を掲載させていただきました。掲載されていない内容についても対応しておりますのでご了承ください。

今後もお気付きの点やご要望をお聞かせくださいますようお願い申し上げます。

ご意見・ご要望	回答・改善等
<p><接遇・マナーについて></p> <p>女性患者に関して、夜の対応は女性看護師でお願いします。また、質問に対して「・・・と思う」とあいまいな返事を看護師がしていました。気を付けたほうが良いと思います。</p> <p style="text-align: right;">他計 7 件</p>	<p>不愉快な思いをさせてしまい申し訳ございません。</p> <p>病棟スタッフはシフト制であり、夜勤を公平に組んでいるため女性スタッフだけの対応は難しいです。そのため、女性のケアに関しては、できる限り女性スタッフで対応しますのでお申し出ください。</p> <p>また、質問に対してあいまいな返事をしないこと、質問されたことがわからない場合は確認して返答するようにいたします。</p>
<p><設備・備品について></p> <p>・765室のトイレドアが開閉時に摩擦音が鳴ります。夜間は他の患者さんに迷惑をかけてしまうので修繕をお願いします。</p> <p>・7階シャワールームの真ん中にあるシャワーの水量が少ないです。そのためとても時間がかかってしまいます。</p> <p style="text-align: right;">他計 7 件</p>	<p>ご不便をおかけいたしました申し訳ございませんでした。トイレドアの摩擦音は潤滑油を塗布しました。また、シャワールームに関しましては、絞り弁を調節いたしました。現在はそれぞれ改善しております。</p> <p>今後も快適な入院環境を保てるよう配慮していきます。</p>
<p><感謝について></p> <p>救急搬送された母を助けていただき、ありがとうございました。不安になっていた私に、先生や看護師さんたちが冷静に接して下さり助かりました。私が慌てても仕方がないと冷静になることができ、心が折れずにすみました。おかげさまで母は以前の健康を取り戻し、健やかな毎日を送っております。</p> <p>夜間救急と入院中お世話になった先生、看護師さん、事務の皆さん、本当にありがとうございました。</p> <p style="text-align: right;">他計 3 件</p>	



医師の配属・異動・退職

新規配属医師

2017年4月

【新規採用】

- ・ 田中 洋子 (呼吸器センター) 日本大学医学部総合外科学講座より
- ・ 渡邊 剛志 (消化器センター) 土浦協同病院より
- ・ 倉田 知幸 (消化器センター) 静岡済生会総合病院 消化器内科より
- ・ 奥村 大志 (消化器センター) 静岡市立静岡病院 消化器総合センターより
- ・ 山口 英貴 (こどもセンター) 横浜労災病院 小児科より
- ・ 酒井 健 (救急センター) 熊本機能病院 整形外科より
- ・ 津澤 佳代 (整形外科) 聖隷沼津病院 整形外科より
- ・ 馬場 みどり (麻酔科) 東京慈恵会医科大学附属病院 麻酔科学講座より
- ・ 大橋 祐介 (緩和医療科) 東京慈恵会医科大学附属病院 麻酔科学講座より
- ・ 糸瀬 昌克 (歯科・歯科口腔外科) 昭和大学 平成24年卒

【附属施設より】

- ・ 加藤 光広 (こどもセンター) 大学病院 小児科より
- ・ 阿部 祥英 (こどもセンター) 大学病院 小児科より
- ・ 岩久 貴志 (こどもセンター) 藤が丘病院 小児科より
- ・ 渡邊 佳孝 (こどもセンター) 江東豊洲病院 こどもセンターより
- ・ 橋本 香織 (こどもセンター) 大学病院 小児科より
- ・ 大澤 俊亮 (こどもセンター) 大学病院 小児外科より
- ・ 玉井 哲郎 (こどもセンター) 大学病院 小児科より
- ・ 幾瀬 大介 (メンタルケアセンター) 烏山病院 精神神経科より
- ・ 星野 靖二 (メンタルケアセンター) 烏山病院 精神神経科より
- ・ 江藤 光彦 (メンタルケアセンター) 烏山病院 精神神経科より
- ・ 花輪 洋一 (メンタルケアセンター) 烏山病院 精神神経科より
- ・ 渡邊 奈々子 (メンタルケアセンター) 烏山病院 精神神経科より
- ・ 刈部 宗応 (メンタルケアセンター) 烏山病院 精神神経科より
- ・ 高田 道哉 (内科) 東病院 内科より
- ・ 安藤 はるか (皮膚科) 東病院 皮膚科より
- ・ 坂上 聡志 (外科) 江東豊洲病院 一般救急外科より
- ・ 阪本 有 (脳神経外科) 大学病院 脳神経外科より
- ・ 吉山 智美 (脳神経外科) 大学病院 脳神経外科より
- ・ 高木 博 (整形外科) 大学病院 整形外科より
- ・ 市原 三義 (産婦人科) 大学病院 産婦人科より
- ・ 七条 武志 (泌尿器科) 大学病院 泌尿器科より
- ・ 摺木 友美 (眼科) 東病院 眼科より
- ・ 川口 顕一朗 (耳鼻咽喉科) 藤が丘病院 耳鼻咽喉科より
- ・ 山田 めぐる (麻酔科) 歯科病院 歯科麻酔科より

- ・ 石田 碧 (麻醉科) 歯科病院 歯科麻酔科より
- ・ 志賀 勇昭 (麻醉科) 歯科病院 歯科麻酔科より
- ・ 宮崎 裕明 (歯科・歯科口腔外科) 歯科病院 顎顔面口腔外科より

【初期臨床研修医より】

- ・ 高宮 新之介 (呼吸器センター) 昭和大学 平成27年卒
- ・ 関 純一 (消化器センター) 日本大学 平成27年卒
- ・ 高野 洋次郎 (消化器センター) 杏林大学 平成27年卒
- ・ 大饗 園子 (消化器センター) 藤田保健衛生大学 平成27年卒
- ・ 氏家 岳斗 (こどもセンター) 昭和大学 平成27年卒
- ・ 服部 透也 (こどもセンター) 昭和大学 平成27年卒
- ・ 永島 崇路 (放射線科) 昭和大学 平成27年卒
- ・ 木村 太郎 (整形外科) 東海大学 平成27年卒
- ・ 小泉 真太郎 (泌尿器科) 昭和大学 平成27年卒

【後期臨床研修医より】

- ・ 白井 將博 (メンタルケアセンター) 日本医科大学 平成25年卒

【内科研修医】

- ・ 望月 健一 (消化器センター) 昭和大学 平成27年卒
- ・ 峯岸 洋介 (消化器センター) 昭和大学 平成27年卒
- ・ 嶋津 英 (心臓血管カテーテル室) 昭和大学 平成27年卒
- ・ 木村 太朗 (心臓血管カテーテル室) 昭和大学 平成27年卒
- ・ 斎藤 惇平 (心臓血管カテーテル室) 昭和大学 平成27年卒
- ・ 浅野 未希 (内科) 昭和大学 平成27年卒

【学外研修・国内留学終了】

- ・ 久行 友和 (消化器センター)
- ・ 森 悠一 (消化器センター)
- ・ 矢川 裕介 (消化器センター)
- ・ 小川 正隆 (消化器センター)
- ・ 加賀 浩之 (消化器センター)
- ・ 齋藤 佳範 (内科)
- ・ 釋尾 知春 (麻酔科)

異動・退職医師

2017年4月

【配置転換】

- ・ 山内 章宏 (消化器センター) ⇒ 救急センター
- ・ 中村 大樹 (救急センター) ⇒ 消化器センター

【附属施設へ】

- ・ 片桐 敦 (消化器センター) ⇒ 藤が丘病院 消化器内科)
- ・ 小金澤 征也 (こどもセンター) ⇒ 藤が丘病院 小児科)

- ・ 渡邊 常樹 (こどもセンター ⇒ 藤が丘病院 小児科)
- ・ 富田 秋沙 (メンタルケアセンター ⇒ 東病院 精神神経科)
- ・ 生末 敏和 (内科 ⇒ 江東豊洲病院 内科)
- ・ 三輪 裕介 (内科 ⇒ 江東豊洲病院 内科)
- ・ 鈴木 茉莉恵 (皮膚科 ⇒ 東病院 皮膚科)
- ・ 田代 祐基 (放射線科 ⇒ 大学病院 放射線科)
- ・ 飯塚 一樹 (脳神経外科 ⇒ 大学病院 脳神経外科)
- ・ 久保 美奈子 (脳神経外科 ⇒ 大学病院 脳神経外科)
- ・ 大下 優介 (整形外科 ⇒ 藤が丘病院 整形外科)
- ・ 和田 悦洋 (眼科 ⇒ 東病院 眼科)
- ・ 並木 千洋 (歯科・口腔外科 ⇒ 歯科病院 口腔外科)

【学外研修・国内留学へ】

- ・ 五十嵐 健太 (消化器センター)
- ・ 加藤 一樹 (消化器センター)
- ・ 櫻井 達也 (消化器センター)
- ・ 松本 航 (消化器センター)
- ・ 趙 智成 (消化器センター)
- ・ 阿部 正洋 (消化器センター)
- ・ 山下 賢之介 (心臓血管カテーテル室)
- ・ 西 正智 (整形外科)
- ・ 齋藤 克幸 (泌尿器科)
- ・ 粟倉 秀幸 (耳鼻咽喉科)
- ・ 伊藤 彩子 (耳鼻咽喉科)
- ・ 高橋 健一 (耳鼻咽喉科)

【退職】

- ・ 和田 尚人 (消化器センター)
- ・ 藤井 崇 (消化器センター)
- ・ 渡部 真裕子 (消化器センター)
- ・ 丹澤 盛 (呼吸器センター)
- ・ 荒木 浩 (心臓血管カテーテル室)
- ・ 大戸 秀恭 (こどもセンター)
- ・ 大橋 祐介 (こどもセンター)
- ・ 小川 浩史 (メンタルケアセンター)
- ・ 梅澤 かおり (メンタルケアセンター)
- ・ 白田 直之 (救急センター)
- ・ 衣笠 えり子 (内科)
- ・ 宇藤 悠 (内科)
- ・ 加賀 康宏 (内科)
- ・ 清水 裕樹 (内科)
- ・ 尾松 睦子 (臨床病理診断科)
- ・ 岩本 泰斗 (麻酔科)
- ・ 弭間 千尋 (麻酔科)
- ・ 寺山 祥子 (麻酔科)
- ・ 杉原 裕子 (麻酔科)
- ・ 今野 歩 (麻酔科)
- ・ 佐藤 良平 (緩和医療科)
- ・ 加藤 光佑 (歯科・歯科口腔外科)

診療統計

前年同月比 ()内は1日平均

診療実日数 2016年2月(入院:29日・外来:24日)、2017年2月(入院:28日・外来:23日)

	入院患者数	外来患者数	救急搬送数	手術件数
2016年2月	17,342人(598.0人)	27,474人(1,144.8人)	397件(13.7件)	720件(36.0件)
2017年2月	17,796人(635.6人)	26,295人(1,143.3人)	412件(14.7件)	751件(37.6件)

TOPICS

平成28年度第2回災害対策訓練を行いました。

平成 29 年 2 月 25 日（土）に病院職員による大地震を想定した災害対策訓練を実施いたしました。当院は、災害拠点病院に認定されており、いつ起きるかわからない大災害に備え定期的に訓練を行っております。

今回の訓練内容は、以下のとおりです。

- ・災害対策本部を立ち上げ、院内の被害状況の確認
- ・トリアージの実施

計 153 名と多くの病院職員が参加し、都筑区役所の職員の方も見学にいらっしやいました。

以下にその様子を一部紹介させていただきます。

《本部訓練の様子》

今回の訓練は、相模トラフを震源とする地震が発生。横浜市内最大震度 7、都筑区内最大震度 6 強という想定で行いました。

右の写真は、発災後に本部員が参集し、病院長（本部長）より、災害対策本部の立ち上げ宣言を行っている場面です。この後に、各部署が被害想定に沿った被害状況を本部に報告し、集計を行います。

その集計結果をもとに、病院の今後の方針を決め、災害拠点病院としての役割を担うため重症患者を受け入れる準備をします。

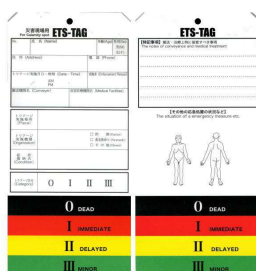


《トリアージ訓練の様子》

災害による混乱の中、限られた人員・医療資源のなかで患者さんの重症度に基づいて、治療の優先度を決定することをトリアージと言います。

今回は負傷された被災者対応のため、2 回のトリアージ・処置・検査・治療・搬送に関わる傷病者の流れ、対応方法などの確認を行いました。

写真は 1 次トリアージの様子で、患者 1 人あたり 30 秒以内で傷病者の重症度の判別を目指します。判別後、傷病者に黒・赤・黄・緑のいずれかのトリアージタグを装着し、病院内へ搬送するか否かを、タグの色で決めます。続く 2 次トリアージでは、1 次トリアージを経た傷病者に対して生理学的評価と解剖学的評価をし、治療の優先順位を決めます。そして患者ごとに医師・看護師・事務等コメディカルの職員が連携しながら適切な処置、記録、連絡を行います。



トリアージタグ

TOPICS

JMECC(内科救急・ICLS 講習会)を開催しました



当日は藤沢市民病院呼吸器内科診療部長の西川先生にお越しいただき、昭和大学の附属病院から4名の内科医が受講しました。昭和大学病院総合内科の齋藤准教授（総合内科）による開会挨拶に始まり、ランチョンセミナー・筆記試験を挟みながら、一次救命処置、気管挿管と除細動、疾病救急と急変（心停止）等への対応の講義と実技実習を繰り返し行いました。受講者4人に対し、ディレクター1人、インストラクター3人、アシスタントインストラクター3人という手厚い体制であったことと相成り、非常に内容の濃い講習会となりました。

※1 JMECC：Japanese Medical Emergency Care Course の頭文字を取った略語。日本内科学会認定 内科救急・ICLS 講習会を指します。

※2 ICLS：Immediate Cardiac Life Support の頭文字を取った略語。突然の心停止に対して直ちに対応するという意味が込められています。

2月26日（日）昭和大学旗の台キャンパス12号館・スキルスラボにて第3回昭和大学JMECCを開催しました。JMECC※¹（ジェイメック）とは、救急医療に接することの少ない内科医が、心停止時のみならず、緊急を要する急病患者に対応できるよう、日本救急医学会策定のICLS※²を基礎に、日本内科学会独自の「内科救急」をプログラムに導入した講習会です。平成24年第28回認定内科医試験より、認定内科医試験における救急蘇生講習会の受講にはJMECCが推奨されています。昭和大学では3回目の開催となり、今年度は北部病院が主催病院となりました。



参加者集合写真

（前列左より）

猪口医師（大学病院・受講生）、朝倉助教（北部病院・受講生）、西川診療部長（藤沢市民病院・ディレクター）、土屋助教（江東豊洲病院・受講生）、榎野講師（藤が丘リハビリテーション病院・受講生）

（後列左より）

原田助教（大学病院・インストラクター）、栗城講師（江東豊洲病院・アシスタント）、山本助教（北部病院・アシスタント）、堀内助教（北部病院・アシスタント）、佐藤講師（藤が丘病院・プース長）、垂水助教（大学病院・インストラクター）

編集後記

皆様がこの号を手にする頃には、桜はどうでしょうか？ 横浜の開花予報では3月下旬ですので、散り始めているかもしれません。新年度が始まり、北部病院でも新人職員、新研修医が期待と不安を抱きながら、行き交っていると思います。大学病院は、最先端の医療を提供するだけでなく、教育も重要な責務です。新人の至らない対応等があるとは思いますが、一緒に医療の明日を担う人材の教育にご協力頂ければ幸いです。2017年度も引き続き『北部便り』のご愛読をお願い致します。

（広報委員長 緒方 浩顕）

北部病院だより 第106号

平成29年4月1日発行

発行責任者 門倉 光隆（昭和大学横浜市北部病院長）

編集責任者 緒方 浩顕（広報委員会 委員長）

発行 地域中核病院 昭和大学横浜市北部病院

〒224-8503 横浜市都筑区茅ヶ崎中央 35-1

電話 045-949-7000(代表)

URL：<http://www.showa-u.ac.jp/SUHY/index.html>

北部病院ホームページにて最新・過去の『病院だより』
がご覧いただけます。